

住生活における愛着の考察 —愛着の多様な性質と時間に伴う変化—

吉岡 む つ み*, 松原 斎 樹**

Discussions on the attachments observed in daily life related to houses

-The various aspects and nature of attachments and related changes with time-

Mutsumi YOSHIOKA* and Naoki MATSUBARA**

要 旨：精神面での豊かさや健康，生活の質の向上が見直される今日，住まいへの愛着が注目されている。住まい及び住まいを構成する「場所」や「もの」への愛着について，34名の男女を対象とした日誌アンケートを用いた調査を行った。その結果から，6つの愛着要因「Ⅰ：好意」，「Ⅱ：積極的関与」，「Ⅲ：身近な存在」，「Ⅳ：対象の喪失」，「Ⅴ：新たな価値の発見」，「Ⅵ：思い出」が抽出され，愛着は多様な性質を持っていることが示された。次に，各要因が持つ特徴について，時間経過に伴う性質の変化に着目して整理することを試みた。その結果，要因によってその特徴や意識形成の過程，愛着に伴う記憶・感情のイメージが異なることが示唆された。また，対象への愛着は対象との出会い，関係構築，認識の変化という時間経過によりその性質が変化することが示唆された。

(2018年10月3日受理)

1. はじめに

住まいを見る視点として，外観などのデザイン性，間取りなどの機能性，構造的安全性，環境面での快適性などがあるが，精神面での豊かさや健康，生活の質の向上が見直される今日，住まいへの愛着が注目されている。これまで人に対する愛着は発達心理学などの分野で縦断的研究 (Bowlby 1988; 遠藤 2010) がなされている一方，場所やものへの愛着に関しては体系的な研究領域が形成されていないことが指摘されている (金谷 2009; 園田 2002)。

場所への愛着に関する先行研究を目的別に見ると，愛着の要因や効果の検討 (彌重ら 2008; クスマラ 2002; 鈴木ら 2008; Hernandez et al. 2010)，愛着の性質 (木野ら 2008; 加藤 2003)，形成過程の構造化 (大山ら 2007; Scannell et al. 2010) などの研究が行われており，筆者らは，五感の感受性に着目して住まいの愛着形成に影響する要因を検討した (吉岡ら 2010a, 2010b, 2010c)。

ここで多くの先行研究は愛着の要因，性質，形成過程などの研究目的ごとに切り離されて論じられており，愛着の多様な性質について整理した研究はあまり見られな

いことに課題があると考えられる。また愛着は時間の経過とともに変化していくものであることは，経験上よく知られていることである。しかし先行研究においては時間と愛着の関係性は今後の課題とされており，愛着の時間の経過に伴う変化に焦点を当てた検討はあまりなされていない。

理由として，愛着は個人の経験やそれに伴う記憶・感情と密接に関連した極めてパーソナルな意識であり，一般化した概念として扱うことが難しいことが挙げられる。この課題を解決するためには，愛着に関連する個人の経験やそれに伴う記憶・感情について詳細に調査することが必要になる。ところが先行研究における調査方法は，主に質問紙調査やヒアリング調査であり，これらの方法はアンケートに記入するタイミング及び時間が制限されるため，愛着のようにふいに思い起こされる意識を汲み取ることが難しい。この面においては，調査手法についても検討の余地があると言える。

以上より本研究では，愛着の対象を，住まいを構成する「場所」や「もの」とし，特に愛着の性質とその時間の経過に伴う変化に着目して調査する。そして得られたデータから共通点を導き出すことで愛着の性質を探り，時間に焦点を当てて整理することを目的とする。

* 司法書士・行政書士 よしおか合同事務所

** 京都府立大学大学院生命環境科学研究科

2. 方法

はじめに、で述べたように、多くの研究で用いられている質問紙調査やヒアリング調査では、調査時間が限られているため、愛着の調査方法としてより適切な調査方法があるのではないかと考える。そこで、本研究では、ふいに思い起こされる意識を汲み取るという課題にアプローチする調査方法として、自伝的記憶に関連する研究で用いられている日誌法（佐藤ら 2008；山本 2008）を参考として作成したノート型アンケートを用いること

にした。調査対象者には、アンケートを一定期間、日常的に所持してもらい、愛着を感じた時の感情をその場で記入するよう指示することで、各個人の愛着に伴う記憶・感情をできるだけ詳細に調査する。2010年12月～2011年3月に18名、その後2011年10月～2011年12月に16名の回答者に日誌アンケートを実施した。

回答者は日誌アンケートを2週間所持し、「住まいを構成する場所やもの」に対して愛着を感じたとき、随時記入する。1つの愛着対象につき、表1に示す調査内容（Q1～Q8）全てに回答するものとし、記入数に制限は

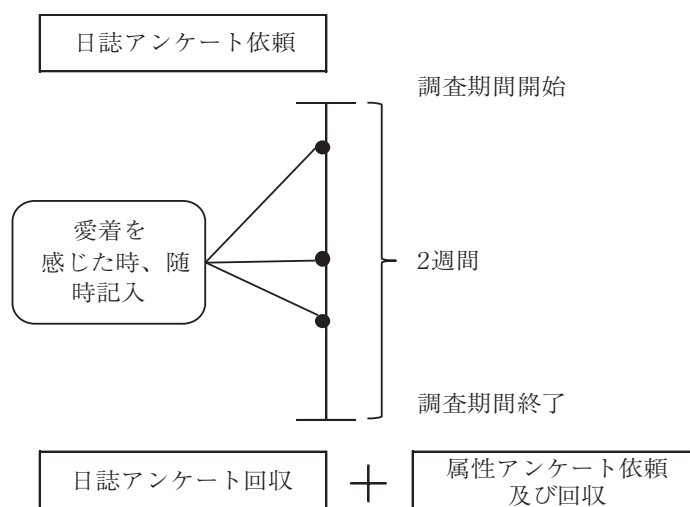


図1 調査フロー

表1 日誌アンケート調査内容

調査項目
Q1 愛着を感じたときの状況 (1) 日時 (2) 滞在場所 (3) 行動内容
Q2 愛着対象 ※住まいを構成する「場所」または「もの」
Q3 愛着の程度 (5段階尺度)
Q4 愛着に伴って生じた感情 (4段階尺度) (1) 心が安らぐ (2) なつかしい (3) あたたかい (4) 大切にしたい (5) せつない (6) 思い入れがある (7) さみしい (8) 手放したくない (9) ほこらしい (10) うれしい (11) わくわくする (12) しみじみする (13) いとおしい (14) 落ち着く (15) 暗い (16) その他
Q5 対象との関係 (1) 対象と出会った年齢 (2) 愛着を感じ始めた年齢 (3) 愛着を感じ始めたきっかけ (4) 対象との接触頻度 (5) 対象との出会いのきっかけ
Q6 対象とともに思い浮かべる情景 (1) 人 (2) 季節 (3) 天候 (4) 時間帯
Q7 対象とともに思い浮かべる五感の印象 (1) 音 (2) におい (3) 肌触り (4) 見た目
Q8 対象に関するエピソード (自由記述)

表2 属性アンケート調査内容

調査項目
(1) 居住履歴
(2) もっとも愛着を感じている住宅
(3) もっとも愛着を感じている住宅への愛着の程度
(4) もっとも愛着を感じている住宅の周辺環境について
(5) もっとも愛着を感じている理由
(6) もっとも愛着を感じていない住宅
(7) もっとも愛着を感じていない住宅への愛着の程度
(8) もっとも愛着を感じていない住宅の周辺環境について
(9) もっとも愛着を感じていない理由
(10) 周辺環境への意識度

表3 アンケート回答者の構成

	若年者 (人) 22歳 - 36歳	高年者 (人) 44歳 - 65歳	合計
男性 (人)	8	8	16
女性 (人)	10	8	18
合計	18	16	34



図2 愛着を感じる「もの」(N=90)

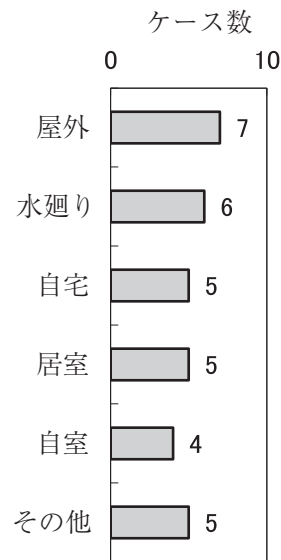


図3 愛着を感じる「場所」(N=32)

設けていない。日誌アンケートの調査期間終了後、回答者の居住履歴などを含む属性について別途アンケート調査を行った。調査フローを図1に、調査内容を表1、表2に示す。

3. 結果および考察

3.1. 住まいを構成する「場所」と「もの」への愛着

22歳から63歳までの男性16名、女性18名、計34名の回答を得た(表3)。なお、22歳から65歳に分布した回答者のうち、22歳から36歳を若年、44歳から65歳までを高年としている。日誌アンケートで得られた愛着対象の数は、一人平均3.6ケース、計122ケース、「もの」が90ケース(図2)、「場所」が32ケースであった(図3)。

「もの」に該当したケースは、回答数の多い順に、「家具(29ケース)」、「置物(14ケース)」、「家電製品(14ケース)」、「服飾(6ケース)」、「文具(6ケース)」、「植物(6ケース)」、「寝具(5ケース)」、「食器(3ケース)」、「乗り物(3ケース)」、「日用品(3ケース)」、「趣味(1ケース)」となっていた。約3分の1を占める「家具」には、ソファ・イス(11ケース)、タンスや棚などの収納(6ケース)、テーブルや机(4ケース)、戸(3ケース)、ベッド(2ケース)などが含まれていた。

「場所」では、回答数の多い順に「屋外(7ケース)」、「水廻り(6ケース)」、「自宅(5ケース)」、「居室(5ケース)」、「自室(4ケース)」、「その他(5ケース)」となっていた。「ベランダ」や「庭」「屋根」など、住まいの外部空間にも愛着を感じていることが分かった。また住まいの内部空間で回答数が多かったのは、「お風呂(4ケース)」、「自室(4ケース)」、「和室(3ケース)」であった。

3.2. 愛着の多様な性質

(1) 愛着要因

愛着要因を調査するため「愛着を感じ始めたことに何かきっかけはありますか」という質問を設け、自由記述で回答させた。全体122ケースのうち、82ケースにおいて具体的な記述があった。先行研究を参考に、自由記述の回答内容から共通する特徴を抽出し6つの愛着要因に分類した。「Ⅰ：好意」、「Ⅱ：積極的関与」、「Ⅲ：身近な存在」、「Ⅳ：対象の喪失」、「Ⅴ：新たな価値の発見」、「Ⅵ：思い出」である(表4)。ひとつの自由記述が複数の要因について触れた記述となっている場合は、Ⅰ～Ⅵの要因の複数に該当することとなる。

以下に、Ⅰ～Ⅵの愛着要因それぞれについて、当てはまる自由記述がどのような内容であるか、またⅠ～Ⅵに分類した根拠となる特徴を示す。

「Ⅰ：好意」が愛着要因となっている対象は18ケースあった。例えば、食器棚について『高価であり、風合いが気に入っている(高年・女性)』、また原付バイクについて『あまりメンテナンスしなくても良く動く(高年・男性)』などが該当し、回答者にとって対象はお気に入りとも言える存在である。他にも、ソファについて『購入してすぐに背もたれの高さ、座面の広さ、全体の長さなど、座っても寝そべっても楽だと気がきました。(高年・女性)』という記述や、マンションのベランダについて『夏に花火が見える(若年・女性)』という記述もみられた。これらの記述から、対象が備えている機能的要素そのものを好んでいる点、対象に接することで自身にとって何らかの良い効果が得られると感じている点に特徴がみられる。

次に、「Ⅱ：積極的関与」が愛着要因となっている対象は11ケースあった。例えばテレビについて『アルバイト代を貯めて買った初めての大きな買い物だったか

表4 愛着が芽生えるまでの過程

記号	愛着要因	該当ケース数	自由記述内容に見られる特徴
Ⅰ	好意	18	・対象が備えている機能的要素を好んでいる
			・対象に接することで良い効果が得られると感じている
Ⅱ	積極的関与	11	・対象を手に入れる過程で時間や労力を費やしている
			・対象との接触の際、自発的な働きかけをしている
Ⅲ	身近な存在	14	・日常的な接触から対象の存在を身近に感じている
			・継続的な接触からいつしか愛着を感じるようになった
Ⅳ	対象の喪失	12	・そばにあることが当たり前だと感じていた対象を喪失して初めて対象の価値に気が付いた
Ⅴ	新たな価値の発見	10	・新たな情報によって対象への認識が変化した
			・対象によって自らの成長を実感する経験があった
Ⅵ	思い出	17	・対象によって過去の日常的な出来事を想起している
			・対象によって過去の特別な出来事を想起している

ら(若年・男性)』, また, ソファについて『家具屋を沢山回って探してやっと気に入ったものと思えたときから。(高年・女性)』という記述や, 自分が描いた絵について『旅行をしたときに, 写真で撮ったものを時間をかけて描いたから。(高年・男性)』という記述がみられた。これらの記述から, 対象を手に入れるために時間や労力を費やしたことによって手に入れたときの達成感や満足感が強くなり, 愛着の形成に影響していると考えられる。また, 対象を手に入れた後でも, 自ら積極的に働きかけることで思い入れが増しているケースもみられた。例えば, 自転車について『高校卒業時に, 汚れていたもので, カゴやスタンドをつけかえて本体をワックスでみがいたりサビをおとしたりと手入れをしていた時(若年・女性)』をきっかけに愛着を感じるようになったという記述などが当てはまる。

続いて, 対象が「Ⅲ: 身近な存在」であるという認識によって愛着を感じている記述は14ケースにみられた。例えばソファについて『生まれてから, ずっと家にあるものなので(若年・女性)』, 庭に植えられている紫陽花について『玄関を出た時にパッと目に入る位置にあった。毎日見ていたので物心ついた時には愛着を感じていた(若年・女性)』などが該当した。「Ⅱ: 積極的関与」とは異なり, 対象との関係性において自発的で積極的な関与を感じさせる記述は見られず, 対象との日常的な接触から次第に対象の存在を身近に感じるようになっていられる。また「Ⅲ: 身近な存在」の対象への愛着を自覚するのは, 「ふとした時」や「いつの間にか」, 「物心ついた頃」といった記述にみられるように, 具体的なきっかけを自覚していない傾向がある。以上より「Ⅲ: 身近な存在」に該当する愛着対象は, 継続的な接触によって穏やかな関係性が構築され, 対象が日常生活の一部となっている点が特徴であると言える。

「Ⅳ: 対象の喪失」がきっかけで愛着を自覚したという記述が12ケースにみられた。例えば実家について, 『結婚を機に離れたから(高年・女性)』, 窓から見える景色について『庭に面していた竹やぶが宅地開発されるようになり, それまで何とも思っていなかったのに竹が切られる音を聞くたびに心が痛んだ(若年・女性)』などである。先行研究において古川ら(2008)は「愛着を抱いている場所を失うこと, もしくは失う危機に直面し, ようやく愛着を抱いていたことに気づく」と述べているが, 本研究の調査結果でも同様の意味を持つ回答が確認されたと言える。その他の記述には, ラジオについて『一年くらい前に電池がなくて1~2日聞けなかったときに, 家で過ごすのが少しもの寂しいと思った。日々の生活になくってはならないと思った。(若年・女性)』などがあった。以上より, そばにあるときはその存在を当たり前のように感じていたが, 対象を失うまたは失う危機に直面することによって, 対象は自分にとってなくてはならない存在であったことに気が付き, 愛着を自覚す

るようになった様子が伺える。愛着対象への認識の変化をもたらしたきっかけが具体的に自覚されており, 対象に愛着を感じるようになった具体的なきっかけを自覚していない「Ⅲ: 身近な存在」とは対照的である。

「Ⅴ: 新たな価値の発見」が愛着要因となっている対象が10ケースあった。例えば, ひな人形について『祖母が私の為に用意してくれたと聞いたことから(高年・女性)』, バイクについて『それまでのれず, 見るものだったのが, のれるものになった時(若年・男性)』, 実家について『父より「この家は祖父と父が建てた」と聞いたころより(高年・女性)』が該当する。対象に関して新たな情報を得ることによって, 回答者自身の内面的な変化が起こり, 対象に新たな価値を見出している。これは, 対象との関わり方に外面的な変化がみられる「Ⅳ: 対象の喪失」や「Ⅱ: 積極的関与」とは異なる特徴である。

対象によって「Ⅵ: 思い出」を感じられることが愛着要因となっている記述が17ケースにみられた。例えばテーブルについて『子どもの頃, 夕食時は家族みんながキッチンのテーブルを囲み, にぎやかに時間をすごした(高年・男性)』, 縁側について『南向きの縁側だったので, 冬でも晴れた日はとても暖かかった。父にひざまくらしてもらい, 耳かきしてもらったことが思い出になっている。(高年・男性)』といった記述があった。このような日常的なシーンを回想しているものもあれば, 特別な出来事が思い出となっているケースもみられた。例えば, 中振袖の着物について『私の成人式に新調してくれたものを娘が成人式に着たから(高年・女性)』, 押入れについて『家族とケンカしたり1人になりたくなかった時, せまくて暗い空間にいと落ち着いた。(若年・女性)』などである。回答者は対象を通じて過去の日常または特別な出来事を回想することができ, そのことが愛着という感情に結びついていることが伺える。

以上6つの愛着要因に分類した結果, それぞれの要因に興味深い特徴がみられた。

(2) 愛着が芽生えるまでの過程

愛着要因の特徴を考察した結果, 抽出した6つの愛着要因(Ⅰ: 好意, Ⅱ: 積極的関与, Ⅲ: 身近な存在, Ⅳ: 対象の喪失, Ⅴ: 新たな価値の発見, Ⅵ: 思い出)は時間経過に着目すると, それぞれ異なる特徴がみられる。

愛着要因ごとの特徴が現れるのは, 「対象との出会い」, 「対象との関係構築」, 「対象への認識の変化」の3点にあると考える(図4)。「対象との出会い」の時点では「顕在型」と「潜在型」, 「対象との関係構築」においては「積極型」と「非積極型」, 「対象への認識の変化」では「自覚型」と「無自覚型」という6つの型に分け, 図4では, それぞれの型が時間経過に伴ってどのような変化を示すかを説明するため模式図を用いて整理する。模

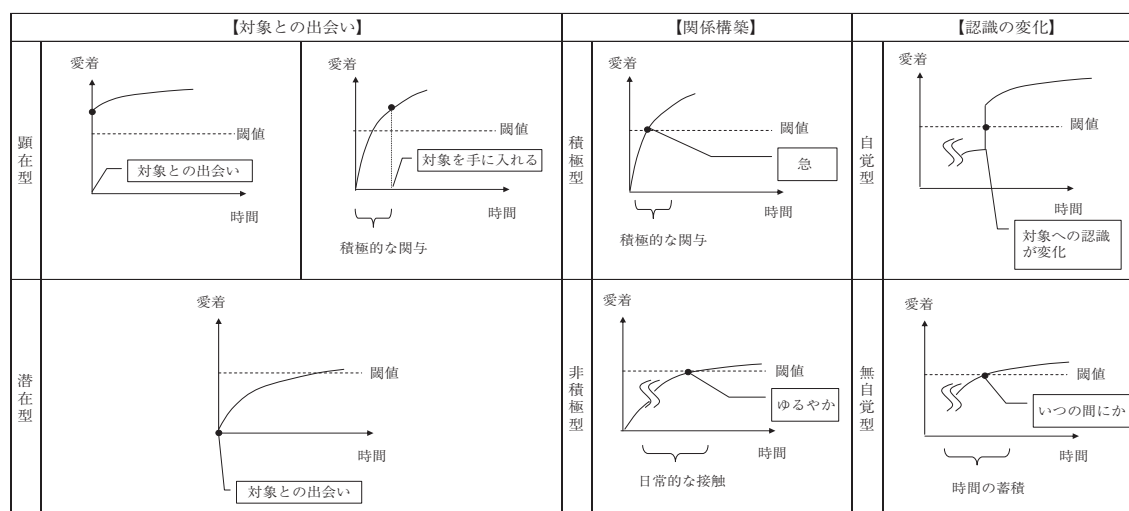


図4 愛着が芽生えるまでの時間的な変化

式図は、縦軸に「愛着」、横軸に「時間」をとっており、軸内の実線は愛着の推移を示している。点線で示した「閾値」を越えることで愛着を自覚することを意味している。

1) 対象との出会い —顕在型と潜在型—

対象との出会いを起点として、大きく2つのタイプに分けられる。出会いの時点で愛着があるものと、出会いの時点では愛着がないものである。そこで出会いの時点で愛着があるものは愛着を自覚していることから「顕在型」、出会いの時点では愛着がないものを「潜在型」とする。

「顕在型」には具体的にどのようなケースが当てはまるのか、I～VIの愛着要因を用いて例を挙げると、愛着要因「I：好意」の特徴にみられるように、対象に出会ったときから対象への関心が高いものである。また「II：積極的関与」の特徴にみられるように対象を手に入れる過程で時間や労力を費やすことで対象への思い入れが増すものも「顕在型」である。

一方「III：身近な存在」では、対象との日常的な接触によって次第に愛着が芽生えるため、「潜在型」に分類される。「IV：対象の喪失」や「V：新たな価値の発見」も出会いの時点では「潜在型」であると言える。

2) 対象との関係構築 —積極型と非積極型—

対象との関係構築という観点からは「II：積極的関与」と「III：身近な存在」に異なる特徴がある。「II：積極的関与」は対象を手に入れるプロセス、または手に入れた後の期間において多くの時間や労力を費やしていることから、対象と密な関係を構築しようとする傾向が見られるため、「積極型」であると言える。一方「III：身近な存在」では対象への自発的な働きかけは記述には

見られていないことから、「非積極型」とする。

「IV：対象の喪失」、 「V：新たな価値の発見」は、認識が変化する経験を経て初めて愛着を自覚しており、その時点までは対象に対して特別な価値を見出していなかったとすると、愛着を自覚するまでの関係性においては「非積極型」であると言える。

また、「VI：思い出」の場合は対象との接触があった当時、「積極型」のような関係があったケースもあれば、「III：身近な存在」のような「非積極型」の関係があったケースもある。

3) 対象への認識の変化 —自覚型と無自覚型—

対象への認識の変化という観点では、愛着を感じるようになった具体的なきっかけが自覚されている「自覚型」と自覚されていない「無自覚型」の大きく2つに分けられる。

「IV：対象の喪失」や「V：新たな価値の発見」は、それまで何気なく接していた対象への認識が変わる経験を自覚しており、愛着を感じるようになったきっかけが明確であるため「自覚型」に分類される。「III：身近な存在」や「VI：思い出」は時間を経ることでいつしか愛着を感じるようになる経緯がみられ、愛着を感じるきっかけがあまり明確ではない。このようなケースは「無自覚型」とする。

(3) 愛着に伴う感情と程度

同じ「愛着」という言葉を用いていても、その背景にある経緯や、包含されている意味内容は異なる。そのように多様である愛着の性質を分析するため、「愛着」以外の言葉を用いて、当てはまる感情を調査した。その結果、愛着要因による6つの分類（I：好意、II：積極的関与、III：身近な存在、IV：対象の喪失、V：新たな価値

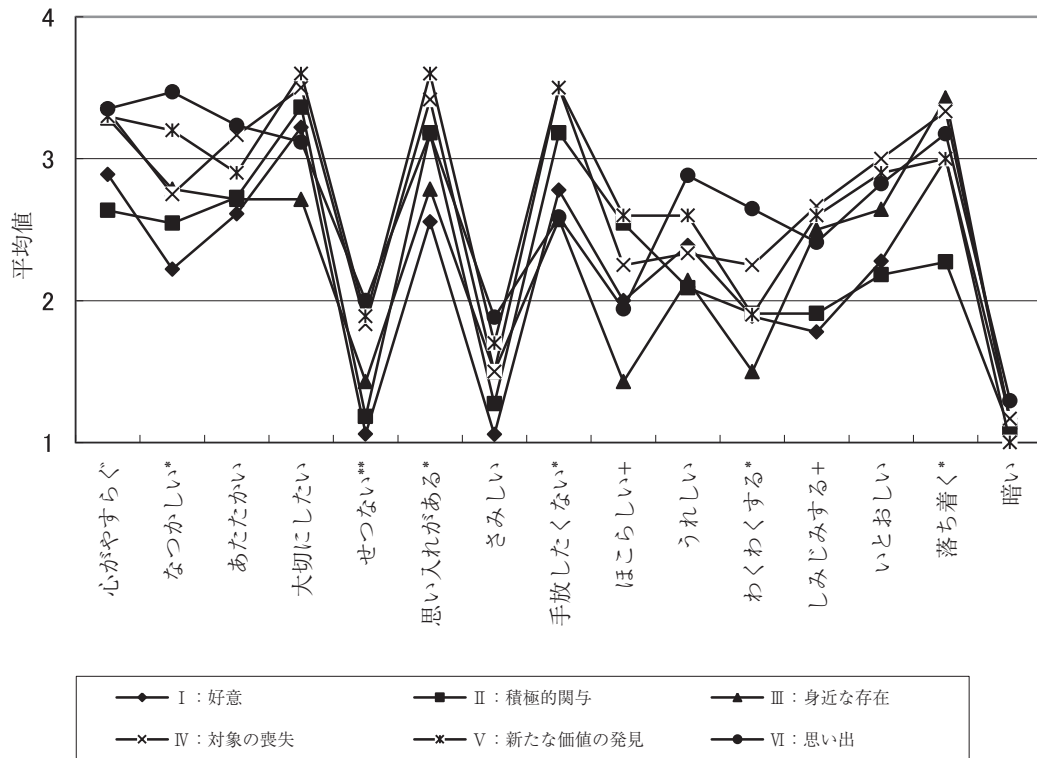


図5 愛着に伴う感情 (**:p<0.01, *:p<0.05, +:p<0.1)

値の発見, VI: 思い出)に異なる特徴が示された。

調査は日誌アンケート(表1)において,愛着を感じた時,その意識に伴って生じた感情として15項目について,4段階尺度(1:当てはまらない,2:少し当てはまる,3:あてはまる,4:非常にあてはまる)で回答させる方法で行った。15項目の感情は,「心がやすらぐ」「なつかしい」「あたたかい」「大切にしたい」「せつない」「思い入れがある」「さみしい」「手放したくない」「ほこらしい」「うれしい」「わくわくする」「しみじみする」「いとおしい」「落ち着く」「暗い」である。結果を間隔尺度とみなして, I~VIの愛着要因それぞれの平均値を示す(図5)。

「I: 好意」は他の要因と比較して平均値が全体的に低かった。「II: 積極的関与」は他の要因に比べ「手放したくない」「ほこらしい」の値が高い反面「心がやすらぐ」「落ち着く」は最も低かった。一方「III: 身近な存在」は「II: 積極的関与」と対照的な傾向を示していた。

また「IV: 対象の喪失」は「しみじみする」「いとおしい」が高く「V: 新たな価値の発見」は「思い入れがある」「手放したくない」が高かった。「VI: 思い出」では「なつかしい」「あたたかい」と共に「せつない」「さみしい」という感情が伴っていた。「VI: 思い出」に見られる傾向は「I: 好意」と対照的であった。

また,愛着に伴う感情は,愛着が芽生えるまでの過程と関連していることが示唆された。対象への認識の変化を自覚している「自覚型(IV: 対象の喪失, V: 新たな価値の発見)」や,対象との関係構築において対象に自発的な働きかけをしている「積極型(II: 積極的関与)」は共通して「大切にしたい」「思い入れがある」「手放したくない」という能動的な感情が伴っていた。一方で対象との関係構築において「非積極型(III: 身近な存在, IV: 対象の喪失, V: 新たな価値の発見, VI: 思い出)」では「心がやすらぐ」という受動的な感情が伴っていた。

対象への愛着の程度を5段階尺度で評価させた結果,愛着要因別に愛着の程度には差があった($p<0.01$)。各要因の平均値は「I: 好意(3.2)」「II: 積極的関与(3.9)」「III: 身近な存在(3.3)」「IV: 対象の喪失(4.4)」「V: 新たな価値の発見(4.5)」「VI: 思い出(4.4)」であった。「I: 好意」「III: 身近な存在」に比べて「II: 積極的関与」「IV: 対象の喪失」「V: 新たな価値の発見」「VI: 思い出」の評価が高い傾向が示された。

3.3. 愛着の醸成

愛着が芽生える過程に6つの愛着要因(I: 好意, II: 積極的関与, III: 身近な存在, IV: 対象の喪失, V: 新たな価値の発見, VI: 思い出)を関連付けなが

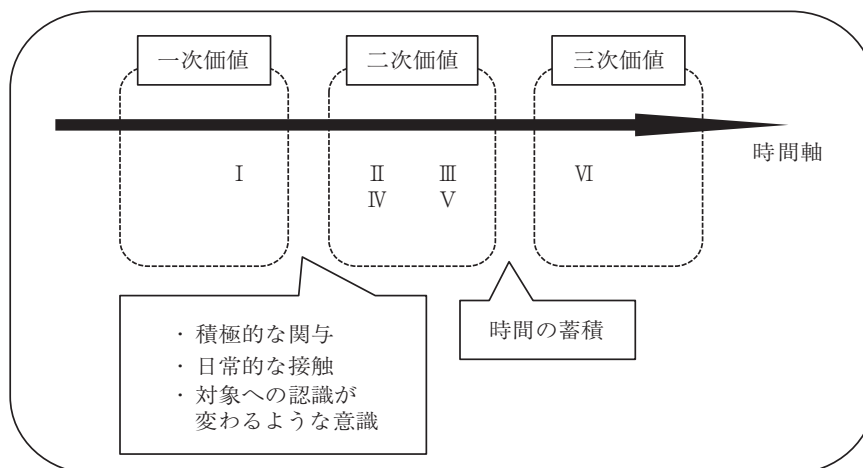


図6 愛着の醸成

ら考察すると、例えば出会いの時点では愛着を自覚せずなげなく接していた対象が、その後、積極的な関与によって「II：積極的関与」の性質を持つことあれば、継続的な接触を通して「III：身近な存在」の性質を持つこともあり、また、認識が変わるような出来事を経験することで「IV：対象の喪失」や「V：新たな価値の発見」にもその価値は変化していき、更なる時間の蓄積で「VI：思い出」の性質を持つようになるのではないかと考えた。

このことを愛着の持つ価値という観点から時間軸にあてはめる(図6)。「I：好意」のような機能的な価値を一次価値とするならば、二次価値とは、「II：積極的関与」のように関係構築の過程において積極的な関与を経て得られる価値、「III：身近な存在」のように日常的で継続的な接触を経て得られる価値、また「IV：対象の喪失」と「V：新たな価値の発見」のように認識が変化する経験を経て得られる価値と言えるだろう。そして「VI：思い出」は更に時間が蓄積し、それらが過去の出来事として昇華された結果とも考えられるため、あらゆる要素を持った三次価値となることが示唆される。

4. 結論

今回、住まいを構成する「場所」や「もの」への愛着について、34名の男女を対象とした日誌アンケートを用いた調査を行った。その結果から、6つの愛着要因を抽出することができ、それぞれの要因には異なる特徴があることから、愛着は多様な性質を持っていることが示された。そしてそれぞれの要因が持つ特徴について、時間経過によって性質がどのように変化するかという点に着目して整理することを試みた。以下に本研究で得られた知見をまとめる。

(1) 愛着は多様な性質を持ち、6つの愛着要因「I：好意」、「II：積極的関与」、「III：身近な存在」、「IV：対象の喪失」、「V：新たな価値の発見」、「VI：思い出」があると考えた。要因によってその特徴や意識形成の過程、愛着に伴う記憶・感情が異なる。

(2) 対象との出会い、関係構築、認識の変化という時間の経過に注目すると、対象への愛着は時間経過によりその性質が変化する可能性がある。対象との出会いにおいては、「顕在型」と「潜在型」に分けられた。対象との関係構築においては、「積極型」と「非積極型」に分けられた。対象への認識の変化においては、「自覚型」と「無自覚型」に分けられた。

人の流動性は増し、あらゆる利便性が追求され、物質的な豊かさも満たされる現代社会において、住生活における「場所」や「もの」との関わり方にも変化が生じていると考えられる。そこで今一度、大切にしたいものや残していきたいものを見直し、愛着のある豊かな住生活・住環境の実現を期待する。

謝辞

調査にご協力いただいたみなさまと原稿作成に協力してくれた赤田智哉氏に記して感謝します。なお本研究の一部にJSPS科学研究費(No.15K00757)の助成を受けた。

参考文献

Bowlby, J (1988) : A secure base: Parent-child attachment and healthy human development, Basic Books

- 遠藤利彦 (2010): アタッチメント理論の現在: 生涯発達と臨床実践の視座からその行方を占う, 教育心理学年報, 49, 150-161
- 古川慎一, 大野隆造 (2008): 環境の変化により愛着が自覚される場所に関する研究: その2 愛着を抱く場所との関わり方, 日本建築学会大会学術講演梗概集, D-1, 115-116
- ハンソンエンドラクスマ, 小島隆矢, 宗方淳, 平手小太郎 (2000): 自由記述による愛着に関わる要因: 住居と居住地域に対する愛着に関する研究, 日本建築学会学術講演梗概集, D-1, 783-784
- 橋本英治, 寺内文雄, 久保光徳, 青木弘行, 鈴木邁 (1998): モノに対する愛着の体系化, デザイン学研究. 研究発表大会概要集 (45), 28-29
- Hernandez,B., Martin,A.M., Ruiz,C. and Hidalgo,M. C. (2010): The role of place identity and place attachment in breaking environmental protection laws, *Journal of Environmental Psychology* 30, 281-288
- 金谷有子 (2009): 愛着の縦断研究とその臨床応用への寄与について, 埼玉学園大学紀要. 人間学部篇 9, 185-196
- 加藤智宏 (2003): 愛着のある場所に関する研究~愛着を感じる理由からの検討~, 日本心理学会第67回大会発表論文集, 3
- 木野和代, 岩城達也, 石原茂和, 出木原裕順 (2006): モノへの愛着の分析: 対人関係とのアナログによる測定, 感性工学研究論文集 6 (2), 33-38
- 大山理香, 添田昌志, 大野隆造 (2007): 大学生のキャンパス周辺地域への愛着に関する研究: その2 場所への愛着の形成と地域における行動への影響, 日本建築学会大会学術講演梗概集, E-1, 1065-1066
- 佐藤浩一, 越智啓太, 下島裕美 (2008): 自伝的記憶の心理学, 北大路書房
- Scannell,L. and Gifford,R. (2010): Defining place attachment: A tripartite organizing framework, *Journal of Environmental Psychology*, 30, 1-10
- 園田美保 (2002): 住区への愛着に関する文献研究, 九州大学心理学研究, 3, 187-196
- 鈴木 春菜, 藤井 聡 (2008): 「地域風土」への移動途上接触が「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究, 土木学会論文集D, 64 (2), 179-189
- 山本晃輔 (2008): においによる自伝的記憶の無意図的想起の特性: プルースト現象の日誌法的検討. 認知心理学研究, 6 (1), 65-73.
- 彌重功, 中村孝之, 河崎由美子 (2008): 住まいへの愛着とその増減要因, 日本建築学会大会学術講演梗概集, F-1, 1503-1504
- 吉岡むつみ, 松原斎樹 (2010a): 五感で自然を感じるものが「住まいへの愛着」の形成に及ぼす影響). 人間・環境学会誌, 13 (2), 39.
- 吉岡むつみ, 松原斎樹 (2010b): 住まいへの愛着の形成過程における自然環境と五感の影響. 日本建築学会近畿支部研究報告集. 環境系, (50), 9-12
- 吉岡むつみ, 松原斎樹 (2010c): 五感で自然を感じるものが「住まいへの愛着」に及ぼす影響, 日本建築学会大会学術講演梗概集. D-1, 1065-1066

